

# 環境の見かたと家族構造

阿 部 一

## 要 旨

「われわれは環境をどのようにとらえているのだろうか」という問いに対して、視覚を中心とする知覚活動の図式としての「見かた」という概念を導入し、問いを「環境の見かたはどのようなものか」という形に置き換えた。そのうえで、根源的な環境としての家族における父母子関係の中から空間・時間の一定の形式が生まれることを示し、環境の見かたを空間・時間の形式によって基礎づけながら四つに類型化した。さらに、父母子関係を生じさせる家族構造の類型と環境の見かたの類型が密接にかかわることを示した。結論は以下の通りである。平等核家族においては、空間・時間の形式は近傍的空間／反復的時間となり、その形式をもつ環境の見かたはアニミズム的見かたとなる。共同体家族においては、コスモスの空間／円環的時間となり、その形式をもつ見かたは宇宙論的見かたとなる。直系家族においては、超越的空間／線分的時間となり、その形式をもつ見かたは一神教的見かたとなる。絶対核家族においては、均質的空間／直線的时间となり、その形式をもつ環境の見かたは近代的見かたとなる。

## I はじめに

われわれは、環境をどのようにとらえているのだろうか。そのとらえ方は、環境そのものとどのような関係をもつのだろうか。すなわち、環境はわれわれの在り方にどのような影響を与えているのだろうか。これらの問題は、人間と環境の相互関係について探究する地理学において、基本的なテーマを構成している。「環境というものに対するわれわれの見方(view)とはどのようなものなのだろうか」という問題意識を1970年代に明確に打ち出したのが、中国系アメリカ人地理学者であるイーファ・トゥアンが著わした『トポフィリア』(1974年)であった。トゥアンは、「トポフィリア」すなわち「場所愛」という概念を通じて、人間と環境との根源的な関係について探求した。環境問題が世界的な課題として認識されるようになった現在、環境汚染の実態の解明、汚染原因の究明、その影響についての評価、これから取るべき対策の検討は、当然必要なものであり、また実際に取り組みがなされている。しかし、客観的な研究対象としての環境問題や環境自体への理解とともに、われわれは自分自身を理解しなければならない。トゥアンが言うように、「自分自身を理解することなしには、環境問題の永続的な解決はおぼつかない」のであり、環境に対する人間の態度を変えようとするならば、人間の心理的・主観的な側面を無視することはできないのである<sup>(1)</sup>。

人間にとっての環境とは、人間が知覚する世界にほかならない<sup>(2)</sup>。われわれは世界を知覚し(=対象の像を手に入れ)、その意味を読み取っている(=環境を認識している)。したがって、「人間—環境」

関係の解明の出発点は、環境に対する人間の認知（＝知覚＋認識）の仕方を明らかにすることにある。その場合に参考になるのが認知の「図式 (schema)」についての議論である。認知の図式とは、言わば心の中の鋳型（テンプレート）である。意味を理解するとは、対象の像をこのテンプレートに当てて、それを何かとして「見なす」ことであると考えられる。見えているものを「～として」見なすとき、この「～」に当たるものが意味である。それとともに、認知の図式には、何に目を向けるかを指定するというはたらきが伴っている。認知心理学者アルリック・ナイサーが言うように、「図式は知覚活動を方向づけ」る<sup>(3)</sup>。このはたらきは、意図あるいは志向と呼ぶことができる<sup>(4)</sup>。そこで、環境の認知について心の中の鋳型と志向という両面から考察するために、本稿では「見かた」という語を用いることとする<sup>(5)</sup>。「見かた」とは、「視覚を中心とする知覚によって環境の意味を理解するための暗黙の前提となっている枠組み＝方向性」のことである。見かたの「かた」は、「型」（枠組み）であるとともに「方」（方向性）でもある。見かた（＝方向性）によってわれわれの知覚活動は方向づけられる。それは同時に、見かた（＝枠組み）を通しての情報の受け入れでもある。

環境の見かたは文化によって異なる。したがって、それを類型化して示すことは、「われわれは環境をどのようにとらえているのだろうか」という問いに対するひとつの答えとなる。環境の見かたは、空間的・時間的な一定の構造をもつ。イマヌエル・カント（1724～1804）によれば、人間の認識は表象を受け取る能力（感性）とこれらの表象によって対象を認識する能力（悟性）という心意識の二つの源泉から生じ、空間と時間は「感性の二つの純粹形式」である<sup>(6)</sup>。すなわち、空間・時間は人間の認識が成立するための主観的条件（直観）であり、われわれは空間・時間という認識の枠を通して世界を見ている<sup>(7)</sup>。ただし、空間・時間という感性的な直観と、悟（知）性的な概念は、異種的なものであり、認知がなりたつためには両者を媒介する「第三のもの」がなければならない。それが、カントのいう「図式 (Schema)」である。「図式」は対象に「意義 (Bedeutung)」を提供する真の唯一の条件であるとされる<sup>(8)</sup>。そのため、本稿の「見かた」とは、視覚を中心とする知覚活動の「図式」ということができる。媒介の働きをする「図式」は、一方では感性的な直観と、他方では悟（知）性的な概念と同種である<sup>(9)</sup>。すなわち、見かたは、空間・時間という直観と同種であり、空間的・時間的な形式をもつ。したがって、環境の見かたは、空間的・時間的な形式という観点から解明することができる。換言すれば、見かたの類型は、空間的・時間的な形式によって基礎づけられていなければならない。

このように、「われわれは環境をどのようにとらえているのだろうか」という問いは、環境の見かたはどのようなものかという問いに置き換えることができる。そして、この問いに答えるためには、認識の主観的条件である空間・時間の形式とはどのようなものを明らかにしなければならない。そのための有効な手掛かりは、家族であると考えられる。なぜなら、家族の中に生まれ出るしかないわれわれにとって、家族関係によって張られ限定される広がりこそ最も根源的な空間であり、家族関係の中で体験される変化と持続こそ最も根源的な時間だからである。本稿の目的とは、家族の基軸である父母子関係を手掛かりとして、空間・時間の形式を抽出し、それに基づいて環境の見かたを類型化したうえで、環境の見かたと世界の家族構造との関係を明らかにすることである。

## II 父母子関係と空間・時間の形式

環境の見かたがどのようなものかを明らかにしようとする場合、まず家族という根源的な環境について検討する必要がある。なぜなら、環境の見かたの原型は、家族の中で身につき、継承されると考えられるからである。われわれは個人としてこの世に生まれてくるわけではない。夫婦という二人からなる共同体の中に生まれた子は、それによって父母子の三人からなる共同体を形成する。母は幼な子の世話をし、この母子関係を父が支える。家族のこの基本的なあり方が、多くの家族を含むより大きな共同体社会において、道具や技術を発明させ、その中で環境に対する行為の仕方が受け継がれていく。同時に、家族は、宗教的な観念をはじめとする物事の見かたが教えられ、またそのような見かたの正当性が確認される場でもある。子にとっては、父母との関係によって成り立つ家族という環境こそが世界の原型となるのである。

環境の見かたは、空間的・時間的な形式をもつ。家族という環境が、母子関係と父子関係という二つの軸によって成り立つものである以上、空間的・時間的な形式もそれらの関係に対応していると考えられる。したがって、家族における母子関係と父子関係のあり方をもとに、空間的・時間的な形式にどのようなものがありうるのかを考察することが、環境の見かたの解明につながっていくであろう。

### 1. 空間の形式

母子関係・父子関係によって張られる空間を考える上で参考になるのは、心のはたらきにおける「包含する」機能を母性原理、「切断する」機能を父性原理と呼んだ心理学者河合隼雄（1928～2007）の考察である<sup>(10)</sup>。母子関係によって張られる空間とは、母子一体の状態を原型とするものである。そこでは、子どもは母なるものに「包含」されている。一方、父子関係は、空間に垂直的な秩序をもたらす。父親は母子密着を「切断」するものとして現れ、その権威・権力は身体的に上からはたらきかけるものだからである<sup>(11)</sup>。したがって、環境の見かたを空間の形式という観点からとらえる場合、母性原理的な空間の形式から「包含」という項を取り出すことができる。「包含」の否定は、父性原理的な（母性原理の否定としての）「切断」である。一方、父性原理は空間に「垂直性」をもたらす。その否定は母性原理的な（父性原理の否定としての）「非垂直性」である。この「包含—切断」と「垂直性—非垂直性」の軸の組み合わせにより、空間の形式は四つの理念型に類型化することができる（図1）。

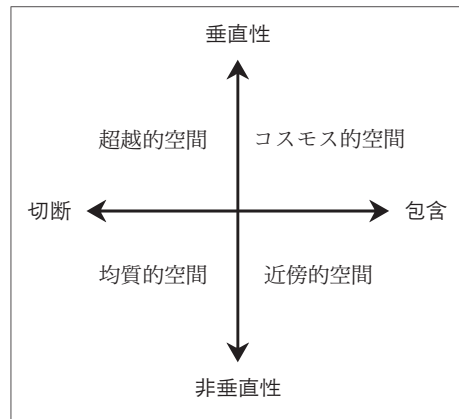


図1 「包含／切断」と「垂直性／非垂直性」の2つの軸による空間の形式の分類

「非垂直性」+「包含」——近傍的空間

子が母に包み込まれている母子一体の状態を原型とする空間の形式である。父性的な権威・権力に

よる垂直的な秩序は弱い。「包含」とは、子が母の温かさの中にあるように、周りを囲まれていながら、その周りに対して開かれているという関係である。このような空間は、位相空間論の「近傍」という概念でモデル化することができる<sup>(12)</sup>。位相空間  $X$  における点  $x$  の近傍とは、点  $x$  を含む任意の開集合（境界を含まない集合）のことである。開集合は、まわりを外部に囲まれていながら、境界を自らの領域に含まないという意味で外部に開かれている。そこで、「包含」と「非垂直性」の組み合わせからなる空間を「近傍的空間」と呼ぶことにする。近傍の境界により、空間は内部と外部が区別されるため、「ウチーソト」が空間の基本構造となる。

#### 「垂直性」+「包含」——コスモスの空間

母子一体の原的な状態に、父性的な権威・権力によって垂直的な秩序がもたらされた家族関係における空間の形式である。子どもの近傍において、垂直方向が意識付けられ、天とのつながりが示される。天と結びついた権威・権力の焦点としての場所は、近傍における中心となり、そこから天に向かってのびる軸が想定される。このような軸は宇宙軸（axis mundi アクシス・ムンディ）とよばれ<sup>(13)</sup>、それにより、近傍に「中心—周縁」という空間構造が生まれる。天と地の階層構造と、それをつなぐ宇宙軸は、宇宙秩序（コスモス）の基本的な要素である。したがって、この空間を「コスモスの空間」と呼ぶことができる。

#### 「垂直性」+「切断」——超越的空間

父（場合によっては母）による管理・統制の力により垂直的なつながりが強く意識される家族関係における空間の形式である。親の権威・権力によって、空間に切断線が入れられ、「われわれ」の領域は周囲に対して孤立する。「中心—周縁」構造において中心が周縁を超越し、言わば中心のみが存在しているため、この空間を「超越的空間」と呼ぶことができる。位相空間論を用いてモデル化するならば、超越的空間とは位相空間  $X$  における集合  $X$  自身である。位相空間の定義と性質より、 $X$  自身は  $X$  の開集合であるとともに閉集合（境界を含む集合）でもある<sup>(14)</sup>。それは、近傍でありながら「ソト」への視線が存在しない、自閉した超越的空間のあり方を示している。

#### 「非垂直性」+「切断」——均質的空間

母性的な一体性も父性的な権威・権力も弱い家族関係における空間の形式である。子どもは、早い段階で母性的な保護・調整からも父性的な管理・統制からも切り離されることで、孤立した存在となる。これは、集合  $X$  において各点  $x$  に対し部分集合  $\{x\}$  が近傍であるという極端な位相によってモデル化できる。これを「離散位相」といい、空間の各点はばらばらである。このような空間は包含性・垂直性が欠如しており、価値や意味の差異をもたない均質なものとなる。したがって、この空間の形式を「近質的空間」と呼ぶことができる。

## 2. 時間の形式

空間の形式と重ね合わせるように、時間の形式も類型化することができる。哲学者和辻哲郎（1889～1960）に従えば、人間存在とは主体的な人間の「間柄」にほかならず、それは静的に見られる時には空間性であり、動的に見られる時には時間性であって、空間性と時間性は相即しているのである<sup>(15)</sup>。母子関係において、時間の原型とは、母子一体の状態において母が子に繰り返し慈しみと恵みを与えてくれるところにある。乳児にとって母親は、空腹の時にはミルクを、寒い時には暖かさを与えてくれるように、必要なものを適切な時に与えてくれる存在である。このような状態において、時間とは繰り返しであり、それは「可逆性」をもつといえる。一方、父子関係は、それまでの状態を「切断する」ことで、時間を更新する。それは、時間に対する外からの介入であり、他律的という時間のあり方をもたらす。したがって、環境の見かたを時間の形式からとらえる場合、母性原理的な時間の形式から「可逆性」という項を取り出すことができる。その否定は「不可逆性」である。一方、父性原理は時間に「他律性」をもたらす。その否定は「自律性」である。この「可逆性—不可逆性」と「他律性—自律性」の軸により、時間の形式を類型化することができる。

時間意識に関しては、社会学者真木悠介（見田宗介）が、宗教学者オスカー・クルマン（1902～1999）による「時間の表象が、ヘレニズムにおいては円環であるのに対して、原始キリスト教、聖書のユダヤ教及びイランの宗教にとっては上昇する線である」<sup>(16)</sup>という指摘をふまえて四つの理念型を提示している。それによれば、時間は、ギリシャ思想に顕著な円環する時間、原始共同体における「くりかえす逆転の反復、対極間を振動することの連続」という時間、ヘブライ＝キリスト教的な「始めと終り」によって区切られた線分としての時間、近代合理主義にとっての無限にのびてゆく均質性をもった時間の四つに類型化される。これらは、図2に示すように「可逆性としての時間—不可逆性としての時間」と「量としての時間—質としての時間」という二つの軸によって分類される<sup>(17)</sup>。

真木による時間意識の分類に基づいて、環境の見かたにおける時間の形式も「円環的な時間」「反復的な時間」「線分的な時間」「直線的な時間」という四つに類型化することができる。ただし、本稿では空間の形式との対応関係を優先させ、図2の「量としての時間—質としての時間」という軸を「他

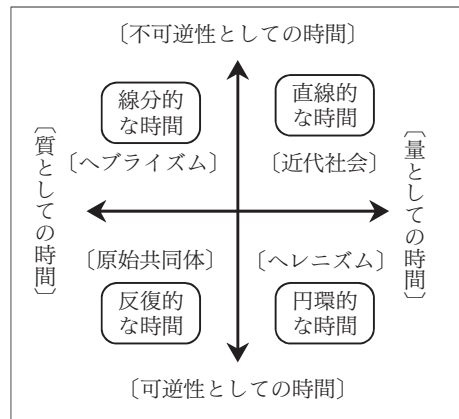
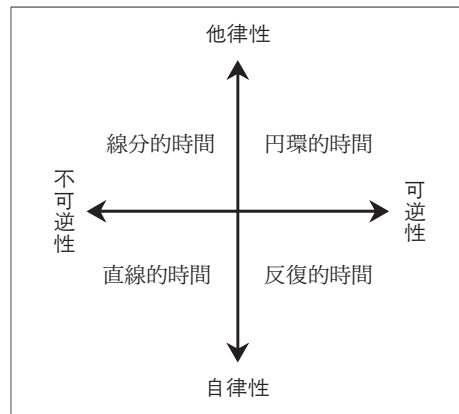


図2 「可逆性／不可逆性」と「量／質」の2つの軸による時間意識の分類

真木悠介(1981)『時間の比較社会学』岩波書店、p.153の図。





律性—自律性」という軸に置き換えた。視覚を中心とした見かたという観点から言えば、われわれは時間を空間的な変化や運動を通じて把握している。それは、時間に対して「直線」「円環」といった幾何学的な表現が用いられていることにも示されている。環境の見かたにおける時間の形式は、空間の形式に従属しており、どちらの形式も母子関係・父子関係から導きだされる二つの軸によってとらえられるのである。

空間における「包含—切断」の軸は、時間における「可逆性—不可逆性」と対応する。また、「垂直性—非垂直性」は「他律性—自律性」と対応する。この二つの軸により、時間の形式は、「自律性」と「可逆性」の組み合わせである「反復的時間」、 「他律性」と「可逆性」の組み合わせである「円環的時間」、 「他律性」と「不可逆性」の組み合わせである「線分的時間」、 「自律性」と「不可逆性」の組み合わせである「直線的时间」の四つの理念型に類型化される(図3)。対応関係にある空間の形式(図1)と時間の形式(図3)から、環境の見かたがどのようなものかを明らかにすることができる。

### III 空間・時間の形式と環境の見かた

環境の見かたについては、拙著『空間の比較文化誌』(2000年)において、子どもにとって最初の「人間—環境」関係である親との関係から「包含—切断」と「垂直性—非垂直性」の軸が抽出され、それをもとに四つの理念型が提示された(図4)。それによれば、「包含」と「非垂直性」の組み合わせは「アニミズムの見かた」、 「包含」と「垂直性」の組み合わせは「宇宙論の見かた」、 「切断」と「垂直性」の組み合わせは「一神教の見かた」、 「切断」と「非垂直性」の組み合わせは「近代の見かた」である。そして、これらの類型に基づいて、世界の文化や文明の特徴がまとめられた。これらの環境の見かたを、家族関係から析出された空間・時間の形式によって基礎づける

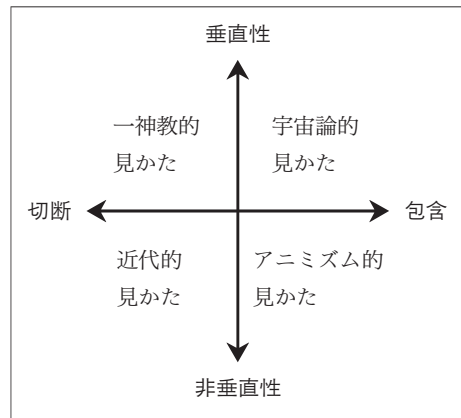


図4 「包含／切断」と「垂直性／非垂直性」の2つの軸による環境の見かたの分類

ことで、根源的な環境とアニミズム、宇宙的宗教<sup>(18)</sup>、一神教といった宗教観念との関係を明確化できるとともに、環境の見かたの四類型化の妥当性を示すことができる。

#### 近傍的空間+反復的時間——アニミズムの見かた

母子密着の傾向が強い家族関係で育まれる近傍的空間は、環境において「近傍系」となる。近傍系とは、位相空間 $X$ における点 $x$ の近傍の全体である。点 $x$ をひとりの人間の視点として、その近傍を考えるならば、点 $x$ を含む家屋、村落、耕地、里山などが同心円状の近傍系を構成し、各近傍の境界によってウチとソトが区別される。最もソトに広がるのが、原野、森、奥山といった自然の領域であり、近傍的空間において、自然は人間の領域を包み込むものとしてとらえられる。

母なる自然の領域から幸や豊穡がもたらされるならば、人間の領域は自然に囲まれつつ、それに対

して開かれているという関係になる。両者の間を、幸をもたらす異貌の神、穀物の精霊、人間の霊魂などが行き来する。その行き来の繰り返しが時間の形式となる。このような時間は、繰り返されるという意味で可逆的であり、そのはたらきが自然に内在しているという意味で自律的な、反復的時間である。

近傍的空間における自然は、穀霊や人間の霊魂が反復的にやってくる生命の源である。人間は、母なる自然がもつ力（＝生命力）を崇めたり、それが衰えないように宥めたりする。自然の生命力（アニマ）への信仰（アニミズム）<sup>(19)</sup>が特徴となるため、近傍的空間／反復的時間に対応する環境の見かたは「アニミズム的見かた」となる。

#### コスモスの空間＋円環的時間——宇宙論的見かた

近傍的空間に父性的な権威・権力による垂直的な秩序が組み合わされたコスモスの空間では、家族という環境において天と結びついた中心性が意識されている。環境はコスモス（宇宙秩序）であり、家族はその一部である。コスモスの中心には、天と地を結ぶ宇宙軸が想定される。それは、山（宇宙山）や巨樹（宇宙樹）であり、それを中心とする秩序は、家や集落、神殿や都市に写像される。天の頂には至高神が存在し、地の周縁には水（宇宙水）の領域があるとされる。大地を取り囲む宇宙水は原初の水でもあり、そこから生まれた神々によって天地が創成されたという神話がみられる。

コスモスの空間において、天は天球や天蓋としてとらえられ、天体の運動が意識される。この天体の円環的な運動が時間の意識と結びつき、それが表象する宇宙秩序がコスモスの空間と重ねあわされる。北極星や太陽によって示される方位は、空間的な秩序であるとともに、循環する季節とも結び付けられる。循環する時間は可逆的である。それはまた、至高神や時をつかさどる神などによって統制・管理されていると信じられているため、他律的であると言える。このような時間の形式は、円環的時間といえる。

コスモスの空間においては、宇宙構造論（コスモグラフィー）や宇宙創成論（コスモゴニー）という形で高度な宇宙論（コスモロジー）が整えられており、その宇宙秩序（コスモス）は、「かのはじめの時（illud tempus イリュド・テンプス）」<sup>(20)</sup>における神々の宇宙創成を再現することで繰り返し更新される。そのため、コスモスの空間／円環的時間に対応する環境の見かたは「宇宙論的見かた」となる。

#### 超越的空間＋線分的時間——一神教的見かた

父（場合によっては母）による管理・統制の力が強い家族関係で育まれる超越的空間は、環境において「われわれ」の空間となる。それは、いわば周縁をもたない中心である。その自閉的な空間の中で、権威・権力の垂直的なつながりが意識され、その系譜がたどられることで、権威・権力の源泉としての一人の偉大なる祖先が想定される。このような祖先は、「われわれ」の時間の始点でもある。世代の継承への強い意識が、偉大なる祖先を始点とする線的な時間を生み出す。ただしそれは、いつ訪れるかもしれない世代の断絶へのおそれを伴うものである。そのため、時間は、始めと終わりのある

線分的時間となる。

一人の偉大なる祖先という観念は、その権威・権力の究極の根拠としての神という観念に結びつく。あるいは、その祖先自身が神としてとらえられる。このような神は唯一性をもち、「われわれ」の空間・時間そのものを作り出した存在となる。「われわれ」の空間が周縁を超越しているように、唯一神は「われわれ」の空間を超越している。それは、無限の彼方に在るとともに人間のすぐ近くにも在り、つねに人間に対して管理・統制の力をふるう。時間もその例外ではない。唯一神は、「死と再生」の循環を管理・統制し、終末をもたらすこともできる。このように、超越的空間／線分的時間に対応する環境の見かたは「一神教的見かた」となる。

#### 近質的空間＋直線的時間——近代の見かた

母性的な包含関係も父性的な管理・統制も弱い家族関係がもたらす均質的空間により、環境は人間にとって単なる容れものとなる。そのような環境では、垂直的な秩序が重視されず、人間の視線が水平的なものとなるとともに、環境と人間の間に切断線が入れられ、環境は観察・観測の対象となる。すなわち、宇宙秩序の垂直性が失われた無限・等方・均質な空間において、人間は自然の秩序から切り離され、それを個々の視点から眺める存在となる。

均質空間の中で、自然は力学的な因果の法則に従い運動している。このような力学的＝機械論的自然観は、17世紀にルネ・デカルト（1596～1650）によって生み出された。デカルト空間の中で、思维する実体は延長をもつ実体から明確に区別される。すなわちこれは、精神と物体の分離である。人間は、神の判断能力を引き継いだ理性をもち、科学技術の力を神の力のように振るって物質世界と対峙する近代的人間となった。近代的人間は、時間も神の秩序から解放した。アイザック・ニュートン（1642～1727）は、万有引力の法則と力学の三法則によって、天上と地上の両界における物体の運動を統一的に説明した。ここにおいて時間は、無限にのびてゆく均質性をもったニュートンの絶対時間となった。それは不可逆的で、宇宙の外からの超越的な力によって干渉されることのない自律的な時間であり、直線的時間と呼ぶことができる。このように、近質的空間／直線的時間に対応する環境の見かたは「近代の見かた」である。

## IV 家族構造と環境の見かた

環境の見かたの類型を空間・時間の形式によって基礎づけるにあたっては、家族を根源的な環境と考え、父母子関係をもとに分類項を抽出した。したがって、父母子関係を生じさせる家族構造と環境の見かたには密接な関係があることが想定される。家族構造については、文化人類学において世界各地の諸民族についての調査が蓄積されている。たとえば、ゴールドシュミットとクンケルは民族学の資料集成である Human Relations Area Files (HRAF) を利用して46の農耕社会の家族構造を分析し、相続制度も考慮してそれらを三つの型に分類した。第一は、父方一括相続を伴う父方居住の直系家族であり、日本、韓国・朝鮮、北西ヨーロッパに分布する。第二は、父系分割相続を伴う父方居住複合家族で、中国、南アジア、中近東、東部・中部ヨーロッパに分布する。第三は、双系分割相続を



特徴とする新居住核家族であり、地中海ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アフロアメリカ、スリランカ、東南アジアにみられる<sup>(21)</sup>。第一の型の「直系家族」、第二の型の「共同体家族」、第三の型の「核家族」が、家族構造の基本的な分類である。

一方、フランスの歴史人口学者エマニュエル・トッドは、社会学者フレデリック・ル＝プレ（1806～1882）による「自由」と「平等」の理念に着目した家族の類型化に基づいて、世界各地の伝統的な農民の家族制度を類型化し、その家族構造からどのような物事の見方や価値観が産出されるかを論じた上で、近現代のイデオロギー（観念・思考形態）の発生や受容と家族型との密接な関係を明らかにした<sup>(22)</sup>。「自由」とは、父親と息子たちとの間の関係によって定義され、息子たちが結婚により家を出て独立の家庭を築くことを意味する。それに対して、自由の否定（父の「権威」の優越）とは、息子たちが結婚後も親たちとともに生活を続けることを意味する。「平等」とは、相続における兄弟たちの関係によって定義され、親の財産が分割されることを意味し、不平等とは、ひとりの息子だけに財産が相続されることを意味する。以上のような「自由／権威」と「平等／不平等」の二つの軸の組み合わせにより、四つの家族型が想定される。トッドは「自由」+「不平等」を「絶対核家族」、「自由」+「平等」を「平等主義核家族」、「権威」+「不平等」を「権威主義家族（直系家族）」、「権威」+「平等」を「共同体家族」と呼んだ（図5）。これらの家族型は、近親婚に対する厳格な規制（外婚制）がみられるヨーロッパの主要な家族型に対応している。しかし、世界には近親婚の規制が緩い文化も広くみられる（内婚制）。そこで、トッドは図5の四類型に外婚制か内婚制かという違い（イトコ同士の結婚を認めるかどうかを基準とする）を組み合わせ、世界の伝統的な農民の家族制度を八つの家族型に分類した。それも参照しながら、本稿では図5の家族型を以下のように読み替える。

「自由」とは、子ども（息子／娘）が結婚により家を出て独立の家庭を築くことを意味し、「権威」とは、子ども（息子／娘）が結婚後も親とともに生活を続けることを意味する。「平等」とは、親の財産が子ども（息子／娘）に分割されることを意味し、「不平等」とは、ひとりの子ども（息子／娘）のみに財産が相続されることを意味する。息子のみならず娘も含めた「自由／権威」と「平等／不平等」の二つの軸の組み合わせにより、「平等主義核家族」には近親婚規定の緩い東南アジアの「アノミー家族」

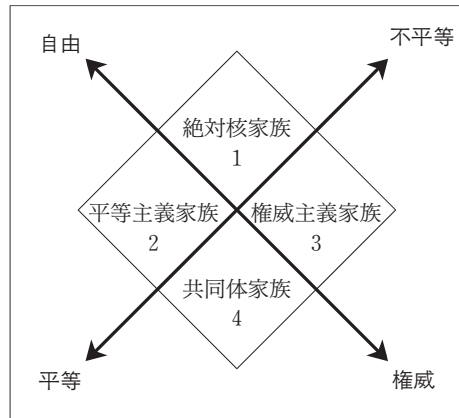


図5 「平等／不平等」と「権威／自由」の2つの軸による家族型の分類

エマニュエル・トッド著、荻野文隆訳（2008）『世界の多様性——家族構造と近代性』藤原書店、p.47の図3。

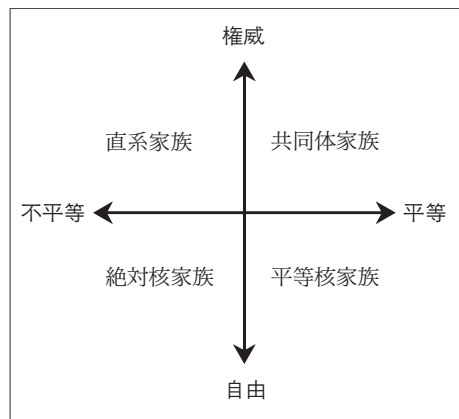


図6 息子のみならず娘も含めた「平等／不平等」と「権威／自由」の2つの軸による家族型の分類

も含まれるため、厳密な均分相続への志向を含意する「平等主義」という語の代わりに「平等核家族」という名称を用いることとする(図6)。

図6の家族型の分類における「平等／不平等」と「自由／権威」の軸において、「平等」は心理学的には「包含」するはたらき(母性原理)に対応している。差別なくすべてを包み込む心のはたらきが、子ども間の平等性をもたらすのである。また、「権威」は心の「切断」するはたらき(父性原理)と結びついている。母子一体性に切断線を入れるのは、父なる存在の「力」(権威・権力)なのである。このように考えると、家族型の分類は、環境の見かたに対応させることができる。家族型における「平等—不平等」の軸を、母性原理の「包含」とその否定である「切断」からなる「包含—切断」の軸に対応させ、「権威—自由」の軸を、父性原理とその否定の空間的な表現である「垂直性—非垂直性」の軸に対応させることができるのである。ただし、現実の家族システムにおいては、「権威」(父性原理)を母が担うこともあれば、「平等」(母性原理)が息子に限られる場合もある。

### 1. 平等核家族とアニミズムの見かた

平等核家族においては、子どもたちは結婚すると家を出て独立した世帯を構える。親が死ぬと財産は子どもたちの間で均等に分けられる。親子の関係は「自由」、子ども間関係は「平等」である。この家族型は、トッドの用語でいうラテン世界(カトリック圏)の「平等主義核家族」と東南アジアの「アノミー家族」に相当する<sup>(23)</sup>。

平等核家族において、子どもは親(母親)に包み込まれている。これはとりわけ、「母親中心性(matrifocality)」と呼ばれるような「女性の地位の高さ」または「男女関係の平等性」が顕著に認められる東南アジア<sup>(24)</sup>の平等核家族に顕著である。東南アジアでは、新婚夫婦は独立して自分たちの世帯を構えるのが普通である(核家族)。しかし、しばらくの間、どちらかの親と同居することが多い。その場合、最も多いのが妻の親との同居である。また、年を取った親や配偶者の兄弟が同居して拡大家族となっていることも多い。財産は性別に関係なく子ども全員に平等に分配されるが(均分相続)、家屋敷を最後に残った末子または未婚の娘に与えて、親が老後を託すこともよくある。家族生活の中心は概ね母親であり、子どもは父親よりも母親との間に強い感情的な絆を培う。

このような家族構造において、家族という環境は子どもを包み込んでいる。垂直的な秩序は欠けており、母性的な温かさの中で慈しみや恵みが繰り返し与えられる。同様に自然が、人間を包み込み、幸や豊穡を反復的に与えてくれるものとしてとらえられるならば、そのような「母なる自然」が信仰の対象となる。それがアニミズム(精霊信仰)である。東南アジアでは、アニミズムが広くみられる。精霊に対する名称は、タイ語・ラオス語ではピー、ビルマ語ではナッ、マレー語系ではハントゥ、アントゥ、アニートなどである。これらは霊的存在として理解されているが、しかし、ピーなどを人格的な存在としての霊魂と限定することはできない。たとえば、ラオ族のピーは、山のピー、水のピー、川のピー、森のピー、大樹のピー、石のピー、洞窟のピーなどさまざまである<sup>(25)</sup>。それらは、自然がもつ目に見えない力なのである。

ラテン世界の平等核家族は、古代ローマの権威主義的な父系共同体家族が進化したものであると考

えられるため、父性原理が色濃くみられる。ローマでは、共和国時代から帝政末期にいたる間に、家父長 (pater familias) の権威 (manus) のもとにあった父系共同体家族が、核家族へと変化していき、それとともに親族システムの双系化がみられるようになった<sup>(26)</sup>。この進化の最終到達点が、地中海ヨーロッパやパリ盆地の平等主義核家族であると考えられる。財産は兄弟間で平等に分割され、女性も遺産の分割に関与する。ただし、兄弟間の対称性原理は、男性の連帯を前提としているため、両性間の不平等が強化される傾向がある。その結果が、核家族の中で男性の優位を肯定するラテン諸国のマチズムである<sup>(27)</sup>。それに加えてキリスト教の影響もあり、ラテン世界では母性的なアニミズム的見かたが隠蔽されている。しかし、地中海地域のキリスト教の実情は、アニミズムといってよいものである。たとえば、聖母崇拜やそれと結びついたルルドの泉への信仰などは、母なる自然の力に対する信仰と言える。また、南イタリア人の民間信仰は、キリスト教の色合いをわずかに帯びた迷信の寄せ集めとされる<sup>(28)</sup>。

## 2. 共同体家族と宇宙論的見かた

共同体家族は、父系共同体家族と母系共同体家族に区分される。父系共同体家族においては、息子たちは結婚しても親の家に住み続ける。したがって、妻帯者である兄弟同士が父親の下に同居する大家族構造が成立する。遺産は兄弟間で均等に分配される。娘は家を出され、外部の男と結婚し、相続から除外される。母系共同体家族においては、一人の女性のもとに「通い夫」が訪れることで子どもができ、子どもたちが成人に達すると、娘は母親のもとに残り、あらたに子どもを作る。男は相続から排除され、財産の所有権は女系によって受け継がれる。一方、財産の運営権は母の兄弟から姉妹の息子に継承される。したがって、権威は最年長世代の女性の兄弟がもつ。このように、共同体家族は権威主義的な親子の関係と平等主義的な子ども間の関係が示す「権威」と「平等」に価値をおく。これは、トッドが強調するように共産主義の価値観そのものである<sup>(29)</sup>。

共同体家族において、子どもは大家族に包み込まれているとともに、家長の権威のもとにある。そのため、共同体家族社会にとっての神とは、天空の至高神を頂点とした神々の大家族となる。その階層性は、垂直的な宇宙秩序（コスモス）にほかならない。また、共同体家族は世代ごとに過去が白紙となり、新たな家庭が築かれるというサイクルを形成する。それと類比的に、宇宙秩序（コスモス）は更新のサイクルを繰り返すとされる。

ローマ、ロシア、中国、アラブの伝統的家族構造は、父系共同体家族である<sup>(30)</sup>。そこでは発達した宇宙論（コスモロジー）がみられる。また、神々も共同体家族的な体系のもとに組織化されている。ローマの神々は、ゼウスを頂点とする共同体家族である。中国においても、天帝を中心とする宇宙的秩序がみられる。ロシアはキリスト教（ロシア正教）圏であるが、宇宙論的な見かたは根強く生き残っており、たとえば19世紀末から20世紀初めにかけてのロシアの哲学・科学思想の潮流は「ロシア・コスミズム（宇宙精神）」と呼ばれている<sup>(31)</sup>。アラブはイスラーム圏であるが、多神教に通ずる聖者崇拜が根強く行われてきた<sup>(32)</sup>。インド北部の父系共同体家族は、発達した宇宙論をもつヒンドゥー教の母体となっている。

インド南部の母系共同体家族は、父系の内婚を禁じ(父方外婚制)、母系の内婚が強く勧められる(母方内婚制)。この非対称な婚姻制度は、カースト制の支柱となっている。カースト制は、人間が分離されるとともに、他者を強く意識することで成り立っている制度である。母方の内婚制が、家族集団を孤立させるとともに、分離という理念を保持させている。そして、父方の外婚制により、共同体家族が完全に閉じてしまうことなく、他者の存在が現実的に認められている<sup>(33)</sup>。このカースト制度の階層的な秩序とは、地上に想定された宇宙秩序にほかならない。

### 3. 直系家族と一神教の見かた

直系家族においては、子どもたちのうちのひとりが結婚しても親の家に住み続け、やがて財産のすべてを相続する。相続は、長子相続もあれば末子相続もある。男系血縁の継続が重視されながら、家族集団の永続のためには、女性を介して財産と文化が継承されることもある。この家族型においては、ひとりが選ばれ、ほかは排除される。すべての人間が「平等」であるとは、考えられていない。そこから帰結するイデオロギーとは、自民族中心主義や地域分派主義である<sup>(34)</sup>。

直系家族では、子どもの間に切断線が入れられるとともに、権威の縦のつながりが強く意識される。そのため、垂直的な秩序のもと、「われわれ」の世界は「彼ら」の世界から切り離される。「われわれ」の世界は、単線的な系譜の連なりの端にある。もう一方の端は、連なりの原点であり、権威の究極の根拠としての神である。そのような唯一の神への信仰が、一神教である。「われわれ」の世界は、唯一神の権威により、まわりの世界から切断され、高く価値づけられている。現実の環境を超越したこの世界のありようは、神の超越性によって支えられている。一神教の神は、宇宙の垂直的な秩序の頂点を占めるが、それは単なる「ひまな神 (dues otiosus デウス・オーティオースス)」<sup>(35)</sup>ではなく、つねに「われわれ」の近くにあり、「われわれ」に力を及ぼしている。すなわち、空間秩序を超越した力をもつのである。

直系家族は、ユダヤ、ドイツ、日本に典型的にみられる。ユダヤの直系家族はユダヤ教を生み出した。ユダヤ教は、ヤハウェを唯一の神とし、ユダヤ人はヤハウェと契約したとする厳格な唯一神教である。それは、キリスト教とイスラームの母体となったが、どちらも平等主義的な家族型に広がることで、神の唯一性が脅かされた。キリスト教は中世になると、聖人や聖母マリアへの崇拝、唯一神のイメージが神とキリストに二分化されるといったことにより、多神教に近づいた。イスラームも聖者崇拝がはびこり、18世紀後半には神の唯一性を主張するワッハーブ派の改革運動を招いた<sup>(36)</sup>。キリスト教の一神教への回帰運動と解釈できる宗教改革は、ドイツで起こった。トッドによれば、プロテスタントの救霊予定説とは、全能の神と、救済に関して不平等な人間たちという観念からなるものであり、それは権威的父親と不平等な兄弟からなる直系家族が以前から存在していた諸地方で受け入れられた<sup>(37)</sup>。そして、日本では、12世紀以降、阿弥陀の慈悲のみが人間を浄土へと至らせるとする浄土宗・浄土真宗が生み出された<sup>(38)</sup>。また、日本の伝統的な村における鎮守への信仰は一神教的であるとされる<sup>(39)</sup>。

#### 4. 絶対核家族と近代の見かた

絶対核家族においては、子どもたちは結婚すると家を出て独立した世帯を構える。相続上の明確な規則がなく、遺産相続はおもに遺言によって行われる。相続者間の平等はあまり考慮されない。この家族型は、おおむねアングロ・サクソンの家族制度ということができる。親子の関係においては「自由」、子ども間の関係においては「平等に対する無関心」を特徴としており、イデオロギーとしては自由主義的個人主義が対応している<sup>(40)</sup>。

子どもの離散を強制するこの最大限に個人主義的な家族型において、環境は子どもを包み込むものでもなければ、何らかの力を及ぼすものでもなくなる。そのため、垂直的な宇宙秩序を欠いた環境と人間の間に切断線が入れられ、環境を観察や観測の対象としてとらえる見かたがもたらされる。したがって、絶対核家族は、人間と知覚世界としての環境を「主体—客体」の二項対立のもとでとらえる近代の見かたの母体となりうる。

伝統的な農民における絶対核家族はヨーロッパ特有のものであり、イングランド、オランダ、デンマーク、ノルウェーがその主要な分布地域である。「自由」のみに価値を見いだすこの地域では、プロテスタンティズムにおいても、神の権威を強化したルター派やカルヴァン派ではなく、自由意志の理想と行ないによる救済を説いたアルミニウス説が広まった。それは、神の権威を弱めることを意味する<sup>(41)</sup>。カトリックからもプロテスタントからも距離を置くことで、「自由」な思索が可能となる。フランスに生まれオランダに移り住んだデカルトは、プロテスタントを国教とするオランダに住むカトリック教徒として、「方法的懐疑」により近代的な「主体—客体」の二元論を打ち立てた<sup>(42)</sup>。そして、イングランドのニュートンが、キリスト教的な宇宙論から数値化された宇宙観への転換を完了させたのである。

絶対核家族は、早くから子どもの独立を促す。イングランドでは、古くから子どもを他家に奉公に出す「送り出し (sending out)」と呼ばれる制度があった。子どもの早期の独立性は、工場労働者の供給に有利にはたらく。それにより、イングランドでは産業革命が急速に進展したと考えられる<sup>(43)</sup>。賃金労働者に支えられた産業化社会と絶対核家族的な個人主義・自由主義は、親和性が高い。そのため、近代化の進展により伝統的な農民の家族構造が崩れると、絶対核家族が拡大していくと考えられる。都市化された社会においては、家族は農地と農具を所有する経営体ではなくなり、経営の責任者としての家長の権威は失われ、相続の重要性は薄れる。子どもたちは賃金労働者として独立し、相続の平等性への関心は弱まるため、近代的家族関係は絶対核家族的なものとならざるをえないのである。

## V 結論

環境の見かたは、根源的な環境としての家族の中で生まれ、受け継がれる。父母子関係において空間・時間の一定の形式が生まれ、それが家族の外の環境へと適用されることで、宗教観念と結びついた環境の見かたになる。見かたとは視覚を中心とする知覚活動の図式であるため、時間性よりも空間性が優越している。そのため、空間の形式と同様に、母性原理的な「包含」／その否定としての「切断」という軸と、父性原理的な「垂直性」／その否定としての「非垂直性」という軸の組み合わせに



よって、四つの理念型に類型化できる。それが、アニミズムの見かた、宇宙論の見かた、一神教の見かた、近代の見かたであった。

父母子関係のあり方は、家族構造によって規定される。世界の家族構造は、核家族・共同体家族・直系家族の三つに大別される。これは、権威主義的な（父性原理が強い）縦型の（垂直性をもった）共同体家族・直系家族と、父性原理が弱い核家族に分けることができる。さらに、子どもへの相続に平等性があるかどうか（母性原理が強いかわい）により、共同体家族と直系家族が分かれ、核家族も平等核家族と絶対核家族に分けることができる。したがって、家族構造の四類型は、環境の見かたの四類型に重ね合わせることができる。その結果、平等核家族とアニミズム、共同体家族と宇宙的宗教、直系家族と一神教の強い結びつきが示され、また近代の見かたと絶対核家族の親和性も明らかにされた。

本稿の目的は、「われわれは環境をどのようにとらえているのだろうか」という問いに答えることであった。その問いは、環境の見かたはどのようなものかという問いに置き換えられ、それに対する答えは、家族構造と結びついた環境の見かたの四類型として示すことができた。平等核家族においては、空間・時間の形式は近傍的空間／反復的時間となり、その形式をもつ環境の見かたはアニミズムの見かたとなる。共同体家族においては、コスモス的空間／円環的時間となり、その形式をもつ見かたは宇宙論の見かたとなる。直系家族においては、超越的空間／線分的時間となり、その形式をもつ見かたは一神教の見かたとなる。絶対核家族においては、均質的空間／直線的時間となり、その形式をもつ環境の見かたは近代の見かたとなるのである。

この結果を踏まえて、われわれは「環境はわれわれの在り方にどのような影響を与えているのだろうか」という第二の問いに進むことができる。この問いは、「人間—環境」関係を人間の主観と客観的な環境との「主客二元論」に基づいてとらえるならば、客観的な環境のあり方（自然）が人間の主観のあり方（文化）にどのように影響してきたかという因果論的な議論となる。このような議論は、自然が文化の特徴を決定するという意味で「環境決定論」と呼ばれ、現代の地理学では批判の対象となっている。必要なのは、近代科学の原理そのものである主客二元論の乗り越えであり、その参考となるのが主観を出発点として物事を考える現象学的な態度である。現象学的な観点からの「人間—環境」論は、哲学者と辻哲郎によって展開され<sup>(44)</sup>、近年はフランス人地理学者オギュスタン・ベルクによって発展的に受け継がれている<sup>(45)</sup>。このような現象学的な地理学（＝風土論）こそ、第二の問いに対する回答への道筋を照らしている。そこでも、家族構造が有効な手掛かりとなる。なぜなら、家族という根源的な環境は伝統的な農業を通じて風土性を帯びていると考えられるからである。

われわれは、文化を共有する共同体社会の一部である家族という環境の中に生まれ出る。その中で環境の見かた（文化）を身につけ、それを通して自然というものを認識するようになる。成長すると、おもに生業を通じて自然にはたらきかけるようになり、自然の恵みによって家族は維持されていく。それは共同体社会の文化が維持されることでもある。したがって、今後、人間と環境の関係、自然と文化の関係を考える上で、家族という媒介項を無視することはできないのである。

## 注

- (1) トゥアン (2008), p.21.
- (2) ギブソン (1985), p.16.
- (3) ナイサー (1978), p.14.
- (4) 計見 (2006), p.265-268によれば, 脳科学において, 運動の際に意思決定に先立って前頭前野内に無意識的に「世界の絵」ができていて, あるいはずかかっていることが明らかにされている。それが「意図」(インテンション)であり, 計見(2006), p.267-268はそれと現象学における「志向性」(インテンシヨナリティ)の概念とは矛盾しないことを示唆している。
- (5) 「見かた」の概念については, 阿部 (1995, 2000) も参照のこと。
- (6) カント (1961), p.88, p.123.
- (7) 黒崎 (2000), p.104.
- (8) カント (1961), p.215, p.221.
- (9) カント (1961), p.215.
- (10) 河合 (1976), p.9-10.
- (11) 権威や権力は上というメタファーについては, レイコフ&ジョンソン (1986), p.21-22を参照。
- (12) 位相空間論に関しては, 青木・高橋 (1979), 森田 (1981), 大田 (2000) を参照した。なお, 集合 $X$ が位相空間であるとは,  $X$ の部分集合族が以下の3条件をみたすことを意味する。
  - (1)  $X$ 自身と空集合がこの部分集合族に属する。
  - (2)  $X$ の有限個の部分集合の共通部分がまたこの部分集合族に属する。
  - (3)  $X$ の任意個数の部分集合の和集合がまたこの部分集合族に属する。
 このとき,  $X$ のこの部分集合族を位相構造または位相という。
- (13) エリアーデ (1974), p.68.
- (14) 位相空間  $X$  の位相構造に属する部分集合を開集合とよぶ。位相構造の定義から  $X$  と空集合  $\phi$  は  $X$  の開集合である。また,  $A$  を位相空間  $X$  の部分集合とし,  $X-A$  が開集合であるとき  $A$  を位相空間  $X$  の閉集合とよぶ。  $X-X=\phi$  は開集合であるから,  $X$  は  $X$  の閉集合となる。
- (15) 和辻 (2007a), p.337.
- (16) クルマン (1954), p.36.
- (17) 真木 (1981), p.148-184.
- (18) 宗教学者ミルチャ・エリアーデ (1907~1986) の用語である「cosmic religion」のこと。宇宙の周期的な更新といった宇宙論的観念を特徴とする宗教 (島田 (2002), p.85-86)。たとえば, エリアーデ (2000), p.270-275は, キリスト教の神学的想像力が宇宙的宗教性に特有なものであることを論じている。
- (19) ここでは, ラテン語のアニマに氣息や靈魂のほか生命という意味もあることから, すべてのものに靈魂があるとすエドワード・B・タイラー (1832~1917) のアニミズムのみならず, すべてのものに生命があるとすロバート・R・マレット (1866~1943) のアニマティズム (プレアニミズム) も含めて, 広義のアニミズムとしている。
- (20) エリアーデ (1974), p.99.
- (21) 花見 (1995), p.231に引用された Goldschmidt and Kunkel (1971) による。
- (22) 本稿で示した家族構造の基本的な類型とその説明は, トッド (1992, 1993, 1999, 2001, 2008) に基づいている。とくに, トッド (2008), p.31-293所収の記念碑的論文である「第三惑星——家族構造とイデオロギー・システム」(原著の初出は1983年) を参考にした。
- (23) 平等主義核家族がローマとラテン文化圏の遺産であることは, トッド (1992), p.62に述べられている。アノミー家族については, トッド (2008), p.65-66を参照。なお, アノミーとは無規範状態を意味する語であり, 社会学者エミール・デュルケーム (1858~1917) が, 社会の規則や規制が緩んだ状態に対して用いた。
- (24) 東南アジアの家族・親族構造については, 花見 (1995) による総括を参考にした。なお, 「母親中心性」と

は、親族組織における母親の役割が構造的、文化的、情緒的焦点となっており、その正当性が社会的に認められていることである（Tanner（1974）、p.131-132）。

- (25) 岩田（1990）、p.72.
- (26) トッド（1999）、p.51及びp.610の註12を参照。
- (27) トッド（2008）、p.179.
- (28) トッド（1999）、p.104.
- (29) 共同体家族と共産主義の関係については、トッド（2008）、p.78-106に詳細な分析がある。
- (30) トッド（1999）、p.50.
- (31) セミョーノヴァ&ガーチェヴァ（1997）に、ロシア・コスミズムの重要な思想家のテキストがまとめられている。
- (32) 坂本（2000）、p.130.
- (33) トッド（2008）、p.234-239.
- (34) トッド（2008）、p.108.
- (35) 宗教学者ミルチャ・エリアーデによる表現。ひまな神の分布については、エリアーデ&クリアーノ（1994）を参照。
- (36) 坂本（2000）、p.129-130.
- (37) トッド（1992）、p.141.
- (38) トッド（1999）、p.199-201.
- (39) 島田（2002）、p.163-172に紹介されている民俗学者原田敏明（1893～1983）の考察による。
- (40) トッド（2008）、p.139, p.164.
- (41) トッド（1992）、p.144-150.
- (42) 小泉（1996）、p.148-153.
- (43) トッド（2001）、p.15-58所収の石崎晴巳「トッド人類学の基礎」、p.29による。
- (44) 和辻（1979, 2007b）を参照。
- (45) ベルク（1992）をはじめとする風土学に関する一連の著作（ベルク（1994, 2002））を参照のこと。

## 引用文献

- 青木利夫・高橋渉（1979）『集合・位相空間要論』培風館
- 阿部一（1995）『日本空間の誕生——コスモロジー・風景・他界観』せりか書房
- 阿部一（2000）『空間の比較文化誌』せりか書房
- 岩田慶治（1990）『カミの誕生』講談社学術文庫
- エリアーデ、ミルチャ著、久米博訳（1974）『エリアーデ著作集第三巻 聖なる空間と時間 宗教学概論3』せりか書房
- エリアーデ、ミルチャ著、柴田史子訳（2000）『世界宗教史4』ちくま学芸文庫
- エリアーデ、ミルチャ&ヨアン・P・クリアーノ著、奥山倫明訳（1994）『エリアーデ世界宗教事典』せりか書房
- 大田春外（2000）『はじめよう位相空間』日本評論社
- 河合隼雄（1976）『母性社会日本の病理』中央公論社
- カント、イマヌエル著、篠田英雄訳（1961）『純粹理性批判（上）』岩波文庫
- ギブソン、ジェイムズ・ジェローム著、古崎敬・古崎愛子・村瀬旻訳（1985）『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社
- クルマン、オスカー著、前田護郎訳（1954）『キリストと時』岩波現代叢書
- 黒崎政男（2000）『カント『純粹理性批判』入門』講談社選書メチエ
- 計見一雄（2006）『脳と人間——大人のための精神病理学』講談社学術文庫

- 小泉義之 (1996) 『デカルト＝哲学のすすめ』 講談社現代新書
- 坂本勉 (2000) 『イスラーム巡礼』 岩波新書
- 島田裕巳 (2002) 『日本人の神はどこにいるか』 ちくま新書
- セミョーノヴァ, スヴェトラナ・G & アナスタシヤ・G・ガーチェヴァ 編著, 西中村浩訳 (1997) 『ロシアの宇宙精神』 せりか書房
- トゥアン, イーファー著, 小野有五・阿部一訳 (2008) 『トポフィリア——人間と環境』 ちくま学芸文庫
- トッド, エマニュエル著, 石崎晴己訳 (1992) 『新ヨーロッパ大全 I』 藤原書店
- トッド, エマニュエル著, 石崎晴己・東松秀雄訳 (1993) 『新ヨーロッパ大全 II』 藤原書店
- トッド, エマニュエル著, 石崎晴己・東松秀雄 (1999) 『移民の運命——同化か隔離か』 藤原書店
- トッド, エマニュエル著, 石崎晴己編訳 (2001) 『世界像革命——家族人類学の挑戦』 藤原書店
- トッド, エマニュエル著, 荻野文隆訳 (2008) 『世界の多様性——家族構造と近代性』 藤原書店
- ナイサー, アルリック著, 古崎敬・村瀬旻『認知の構図——人間は現実をどのようにとらえるか』 サイエンス社
- 花見楨子 (1995) 「東南アジアにおけるジェンダー分析の試み」『一橋大学研究年報 社会学研究』34, p.217-260.
- ベルク, オギュスタン著, 篠田勝英訳 (1992) 『風土の日本——自然と文化の通態』 ちくま学芸文庫
- ベルク, オギュスタン著, 三宅京子訳 (1994) 『風土としての地球——自然と文化の通態』 ちくま学芸文庫
- ベルク, オギュスタン著, 中山元訳 (2002) 『風土学序説——文化をふたたび自然に, 自然をふたたび文化に』 筑摩書房
- 真木悠介 (1981) 『時間の比較社会学』 岩波書店
- 森田紀一 (1981) 『位相空間論』 岩波全書
- レイコフ, ジョージ&マーク・ジョンソン著, 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店
- 和辻哲郎 (1979) 『風土——人間学的考察』 岩波文庫
- 和辻哲郎 (2007a) 『倫理学 (一)』 岩波文庫
- 和辻哲郎 (2007b) 『倫理学 (三)』 岩波文庫
- Goldschmidt, Walter and Evelyn J. Kunkel (1971) “The structure of the peasant family,” *American Anthropologist*, 73, p.1058-1076.
- Tanner, Nancy (1974) “Matrifocality in Indonesia and Africa and among Black Americans,” In Michelle Z. Rosaldo & Louise Lamphere (eds.), *Woman, Culture, and Society*, Stanford University Press, p.129-156.

